

平和を考える。「融合文化」が21世紀を変える。
Thinking about Peace “Harmony and Fusion of Cultures”
Can Change the 21st Century

外村 佳代子

TONOMURA Kayoko

Abstract: The 20th Century was the century of wars and genocide. Technological development made slaughter easy. The 21st Century opened with the start of a struggle against terrorists such as those who attacked America on September 11, 2001. Why cannot wars be stopped even though everybody hates wars and longs for peace? Moves towards peace can be made through exchange in an area quite different from that of political and diplomatic negotiations. They can be started in any field, for example in art, like fine art, literature, or music or in business, like design and construction of buildings, or trade. Everyone individual wants to build a peaceful world through person-to-person exchange between cultures. The 21st century is the century of “Harmony and Fusion of Cultures”.

Keywords: Peace. Harmony and Fusion of cultures

1. はじめに

20世紀は戦争とジェノサイドの時代であった。科学技術の発展は軍事力の発展である。そしてそれは殺戮の方法とその規模の拡大を容易なものにし、瞬時に目的を遂げる大きな立役者となった。平和を願いながら迎えた21世紀は、アメリカ9・11に象徴されるように新たな敵、テロリストとの戦いという幕開けとなった。誰もが争いを憎み平和を求めるといいながら、なぜ争いは無くならないのか。政治や外交といった政府レベルでの和平交渉でしか戦争を回避する手段はないのだろうか？

私たち個人が出来る分野での異文化との交流から、共に理解を深め合い、平和な社会を築き上げていくこともひとつの方法といえないだろうか？

それは交渉ではなく交流である。そしてそれはどんな分野からはじめても良い。美術、文学、音楽といった芸術面からでも、建築、貿易、経済等のビジネス面からでも構わないのだ。

和平へのもう一つの手段、それは個々人が鍵を握る。

2. 学会との出会い

平和を願い、自己意識だけは高めていてもそのアプローチの方法となるとなかなか見つけられない。そんな折、「国際融合文化学会」の存在をインターネットで知った。その学会の会則に、私が長い間求めていた場所であることを記す条項がある。

第2条(目的) 本会は、世界の文化の調合と調和を融合しもしくは創造に関わる研究・享受を通じて、会員相互の融和と研究の促進を図り、併せて人類の調和と精神的進化に寄与することを目的とする。 -

とある。そして会長である上田邦義教授の打ち立てられたモットーに感銘を受けた。

「全ての生あるものがその「生」を享受し全うしうる調和を創造すること」 -

上田教授は、学会の入会の薦めでさらにこう続ける。

世界中の全ての人々に本会への入会をお勧めする。それは国境に見張りのいる閉鎖的な国ではなく、同じような考え方をする、何よりも平和を愛する人々の集まりである。そして未来にはヴィジョンがある.....同じ人間の仲間として他の全ての人々とより良い関係をつくるという.....。

われわれは全ての人々に懇願する.....戦いと競争をやめて欲しいと。自己中心の考えはもはや時代遅れの過去のものとしなければならない。もっとよく人間を理解しなければならない。もしもわれわれが、芸術・文化・医学・経済・政治を通してよりよい人間理解を得られるなら、それはこの目的達成への大きな推進力となる。

世界の平和を願い、われわれのこうした活動に共感される方は、市民権や宗教や人種や信条の如何に関わらず、ぜひ本会に入会していただきたい。(会長 上田邦義) -

国境と言う人が決めた垣根ではなく、心が決めた集団を作ること望んで設立された。そして、その垣根が取り払われると、次の望みは戦いの無い平和である。争いの元凶は、自己中心的な考え方と、人間同士の無理解が生んだ産物であるとすでに答えを出している。芸術・文化・医学・経済・政治といったあらゆる分野が垣根を越えて手を取り合うことに、将来の希望を見出している。どこの国籍を持つ人でも、どのような宗教をあがめていても、肌の色や言語が違っていてもこの学会に入る障害、垣根にはならないのだ。

3. 平和とは何か

私たちは簡単に「平和」と口にするが、そもそも平和とは何であろうか。ノルウェーの平和研究者、平和学の第一人者であるヨハン・ガルトゥング Galtung, Johan (1930-)は「暴力の無いこと。」と平和を定義している。 - ここで言う暴力とは直接的に危害を加える人為的暴力だけではなく、加害者が見えない暴力、たとえば人種、性別、社会的差別等の構造的暴力(間接的暴力とも言う)のことをさす。戦争とは人為的暴力の最もたる集まりである。私たちが通常考える平和とは直接的暴力を考えることが多く、武器の削減や核兵器の根絶を訴えるに過ぎない。平和学の観点からはそれらを消極的平和とよぶ。 - それとは別に、構造的暴力の無い世界をヨハン・ガルトゥングは「社会正義」とよび、個人や集団の持っている本来性(潜在的实现可能性)が暴力によって阻害されず、可能性を十分に引き出すことが出来る状態を「積極的平和」とよんでいる。 - もちろんこれらを現実なものとするには集団間の格差が無いことが条件となるはずである。だが、実際は発展国と途上国等に見られるような貧富の差や、強国主義の結末として国同士の不均衡が起こっている。1980年代に登場した覇権安定論などが分かりやすい例であろう。消極的平和の為には覇権国(アメリカ)の安定と繁栄が重要であり、それが世界のシステムを安定させ覇権に挑戦する大国の出現を防ぐことができるという。この理論の論点は大国同士の戦争を防ぐためであると言うが、その影に起こる中小国間同士の戦争はソマリアやアフガニスタン、ルワンダ等に見られるように大国に翻弄された紛争、内乱である。 -

人為的暴力だけでなく、社会差別や人種差別、宗教紛争、男女間の不平等、出自による差別等、ありとあらゆる世界で争いが起きている。これら無くすことは政治家や軍人や政府関係者で無ければ出来ないことなのだろうか。私たち個人レベルでできることは何なのだろうか。どのようなことなら可能なのだろうか。

人はそれぞれおかれている立場が違う。会社員や自営業、先生や学生。だがそれぞれの自分の領域で平和を愛することと、そのための努力を怠らなければ本来、平和な暮らしを手に入れることが出来るはずだ。まずは家の中で、次に地域で、やがて国単位にその努力を広めていけば良いだけのことなのかもしれない。もちろん言葉で言えるほど簡単ではない。始める努力の次に、継続の努力が必要になってくる。自分の領域の中、それは上田教授の書かれたとおり、芸術・文化・医学・経済・政治などどのような分野からでも始められるのだ。上田教授が始められた分野は、芸術、とりわけ日本の伝統芸能でもある「能」とシェイクスピアとの融合からである。今では聞きなれた「英語能」「シェイクスピア能」ではあるが、それぞれの文化と意思を持ったもの同士また、異質のもの同士を結びつけるということそして、それを始めることへのエネルギーは並大抵のものではない。そこで生まれた融合文化は、「シェイクスピア能」だけではなく、人と人同士も融合させるエネルギーをも持ち合わせているのだ。上田教授にとって、能は手段であるといえる。能を通じてあらゆるものを結合させやがて完全に融合させる。それこそが、上田教授の求めている形なのかもしれない。

4.3 Kの法則

上田教授の提唱する「3K」の法則というのがある。 - 日本語の「心・言葉・行動」からそれぞれの頭文字をとったものである。英語では The Law of TWA (Thoughts, Words, and Actions) である。 - これこそが世界を平和へと導くキーワードだと言う。互いに相手の文化や伝統や価値観を尊重し、調和ある世界を作り上げることが重要であり、尊重している間は調和であるが、さらに相手を愛し合えば、融合・融和に至る。 - と結論付けている。この「3K」の法則はたいへん面白いと感じた。この3つは確かにひとつのパラダイムとして成り立つのである。心の無い行動や言動は相手にとっても好ましいものではなくむしろマイナスのイメージを植えつけてしまうのである。心や言葉はあるのに、行動が伴わなければこれもマイナスである。心や行動が本物であっても言葉不足であったり口の利き方が粗暴であればこれもまた、いい印象は与えない。この3つのうち何が欠けても人間関係は成り立たないのである。

上田教授が長年情熱を傾けてきた「能」の世界。実はここにこの3K「心・言葉・行動」が絶妙なバランスで保たれており、それがすべてであるといったら過言であろうか。能の

2大要素である「謡い」は「言葉」である。「舞い」は「行動」。それらをつかさどるのは、演じている自分の現世の肉体と、幽玄の世界を生きる魂である。肉体と魂は「心」によってコントロールされているのだと思う。

「能」には「悟り」と「救い」の精神があるという。まさしく、「3K」と「能」には同じ目的を所有していると考えられる。

5. 能

2001年にユネスコ（United Nations Educational Scientific and Cultural Organization）は日本の伝統芸能「能」を「無形文化遺産」に登録することとした。これは「人類の遺産」として後世まで伝え守り続ける義務を、現在から未来の人々に課したことになる。日本で生まれ、伝承されてきた能の歴史は、人々の歴史と共に変貌や発展を続け、今日の新しい形の「能」を作り上げている。

「能」の歴史は古く、奈良時代にさかのぼると言う。今の中国、「唐」から渡ってきた「雑芸」「散楽」に由来されるという。- 「散楽」は、軽業や曲芸、手品や幻術、乱舞やこっけいな物まねなどの狂言の源流的な芸を内容とするところから始まる。

それらは鎌倉時代に入ると、寺社に付属して国土安穩・天下泰平の祈祷芸となり、「猿楽・申楽」と呼ばれるようになる。今の能の開祖とも言うべき観阿弥は、「曲舞」のリズム中心の音曲と作劇や新たな手法を取り入れて人々を魅了し、さらにその息子、世阿弥は数々の名作を世の送り出し、観阿弥の作風とは違う、歌舞を中心とする幽玄な余情あふれる「夢幻能」を志す。このふたりの親子、観阿弥・世阿弥によって日本の伝統芸能である「能学」（能と狂言の総称）として確立される。- 世阿弥は能役者の心得書である『風姿花伝』を執筆。これには能役者としての修行法、心得、演技論、歴史、能の美学などが具体的に書かれ、能の芸道論としてまた、今日でも日本の美を追求した古典文学としても通用する。

体系化され、長い日本の歴史の中で、日本人の心と宗教的な部分とが現れる「能」は今世紀に入ってさらに進化を続け、新たな世界を作り上げてきた。上田教授は「悟りの芸術」「救いの芸術」として能を捉え、優れた能を見たときに感ずる宗教的な感動を世界に知らせたい、能にある「悟り」「救い」の精神をシェイクスピアに溶け込ませたいと、「能」とシェイクスピアの融合、「シェイクスピア能」を完成させた。

昭和48年の米国を皮切りに、あらゆる国と地方で公演や講演を行い、その知名度を高めてきた。自らも観世流で修行を積み、シテとして舞台を務めると共に優れた演出家としてもその成功を治めてきた。上田教授演出の舞台を務める役者陣は、教授の教え子であったり、日本の能役者としての第一人者でもある津村禮次郎氏、狂言界からは野村万作氏、万作氏の愛弟子であり実子でもある野村萬斎氏などそうそうたるプロフェッショナルたちである。保守的で伝統を重んずる能の世界において新しい試み、さらには外国の言葉で外国の作家物となれば、反発や障害の大きさも想像を絶するものであったであろう。そのご苦労から生まれた新たな演出方法もある。たとえば「視覚による空間利用」の演出である。2000年、明星大学で行われた「能楽講座」での演出方法である。講演の後「英語能・ハムレットより、洋装による独吟、独舞」を披露した。白いシャツに黒いズボン、舞台は板の上に能舞台を表わす白いシートが敷かれ、その周りは黒い縁取りが施されている。このモノトーンの舞台（世界）でモノトーンの衣装で、舞い扇の金銀を効果的に使いながらたいへん美しい舞台を自ら演出した。 -

その観客の一人も、これこそ明治時代に夏目漱石が描いていた「シェイクスピア・能」ではないか？ - と絶賛、感想を述べている。さらに昨年2004年私が拝見した軽井沢公演「能・ハムレット」でも、狩衣に面をつけず、頭にティアラのような小道具を用いて王子としての威厳を象徴した。その王子がオフィーリアの墓前で涙に咽ぶ様子が、光の反射で光るその小道具と涙のイメージが重なりたいへん美しいものであった。

6. 最後に

さらに上田教授の作り上げる舞台の美しさについて、最後に特筆をしたいことがある。シェイクスピアのオリジナル戯曲では、オフィーリアは悲しさのあまり気がふれ水死をする。それを知ったハムレット王子がさらに悲しみと怒りに打ちひしがれ、結果的に人を殺し自分も殺されると言う大きな悲しみのうちに舞台の終盤を迎える。だが、上田教授の創り上げる「幽玄の世界」でのハムレットは、現世でその悲しみの淵からオフィーリアの魂を慰め、自らも他を（父や母）許し、現世の恨みや悲しみをその先の死後の世界に持ち込まない。人の魂が、たった1度のこの世のものだけであるならば、命が尽きる時にすべてが終わる。だが、上田教授の創る世界は「現世も死後の世界」も同じひとつの世界なのである。上田教授の創るハムレットは、「悟り」と「救い」の世界であり、これこそ、教授の信条でもある「愛は助けること」 - なのである。能の奥底に潜む「悟り」と「救い」の

精神は、インモースがその著書の中で述べているように、人間のこころの秘奥へのすばらしい洞察に行き当たるであろう。 - このような精神文化の高さを、押し広めることが出来れば、争いの無い、平和な世界を手に入れることが可能になるのではないだろうか。

註

『融合文化研究』第1号、国際融合文化学会、2001 p92 会則第2条より、

『融合文化研究』第1号、国際融合文化学会、2001 「モットー」

国際融合文化学会 Web site より、「はじめに（入会のおすすめ）」。

<http://atlantic.gssc.nihon-u.ac.jp/~ISHCC/motto/index.htm>

『平和学がわかる。』 p143-1 段目 1-3

同上 p144-1 段目 12-18

同上 p144-2 段目 1-6

同上 p144-3 段目 1-18

『融合文化研究』第2号、国際融合文化学会、2002 pp123-25,26

同上 pp123-26,27

同上 p126-14

『能楽ハンドブック』 pp2-3

同上 p3

国際融合文化学会 Web site より、「明星大学能楽講座」 p3 ご意見ご感想抜粋。

同上 p4

『融合文化研究』第2号、国際融合文化学会、2002 p126-11

T. インモース 尾崎賢治訳 『変わらざる民族』 南窓社 昭和47年 p170

参考文献

一色清 編集 『平和学がわかる。』 朝日新聞社 2002

シェイクスピア（原作）福田恒在訳 『ハムレット』 新潮文庫 昭和42年

林望 『すらすら読める風姿花伝』 講談社 2003年

津村禮次郎 『能がわかる100のキーワード』 小学館 2001年

戸井田道三監修『能楽ハンドブック』三省堂 1993年

宗方邦義『能・狂言研究 歴史と特色』私家版

『融合文化研究』第1号、国際融合文化学会、2001

『融合文化研究』第2号、国際融合文化学会、2002

T.インモース 尾崎賢治訳『変わらざる民族』南窓社 昭和47年